

## 論 説

順天堂大学医療看護学部 医療看護研究23  
P.49-57(2019)

## 老年期の主人公の生き方とつらさを乗り越える強さ

—小説「おらおらでひとりいぐも」の場合—

### A Way of Life and the Strength to Overcome Suffering in a Heroine in Old Age : An Examination of the Novel “I Will Go by Myself”

山 岸 明 子<sup>1)</sup>  
YAMAGISHI Akiko

#### 要 旨

若竹千佐子氏の小説「おらおらでひとりいぐも」の主人公—74才の高齢女性—を取り上げ、彼女が語る対象喪失への対処—59才の時に最愛の夫に死に別れた時の対処—の仕方や、その後の老年期の生き方について、著者の記述に対する心理学的な解釈を行い、主人公はそれまでどのような人生を生きてきてそこにどのような問題があるのか、彼女はつらい出来事にどう対処して老年期を生活しているのか、つらさに対処する彼女の強さを可能にしたものは何かについて、心理学の観点から考察を行った。彼女には母親、夫、子ども等、他者との関係に心理学的な問題がいくらかあるが、対象喪失のつらい状況に対して様々な方法で対処し、今まで生きてこなかった別の生き方—個を充実させる生き方—をしつつ、それまでとは違った形で他者と繋がることができ、エリクソンの老年期の発達課題の「統合」につながる生き方ができていることが示された。そしてそれを可能にしたのはそれまでに彼女がもつた他者との関係性や彼女がもつ資質—レジリエンスや個としての強さ—であることが論じられた。

キーワード：老年期、統合、対象喪失、個の充実、レジリエンス

Key words : old age, integration, object loss, individual fulfillment, resilience

#### I. はじめに

多くの人は人生のどこかで躓いたり、つらい出来事に出会う。大切な人やものを喪失する対象喪失（小此木, 1979）、いくら頑張ってもうまくいかない等。でも困難なその状況を何とか乗り越えて生きている。どのようにしてそれらを乗り越えるかは、誰にとっても切実で重要な問題であり、心理学でもストレス・マネジメントやレジリエンス（困難な状況でもくじけず立ち直る力）の研究が近年盛んである（Lazarus & Folkman, 1984/1991 ; Goldstein & Brooks, 2005 等）。文学でも逆境にある人が困難と闘いながら何とか立ち

直るといふ作品は多く、大きなテーマの一つでもある。山岸（2015、2017）は心理学の観点からそのような文学作品の分析を行っている。

老年期は衰退と喪失の時期であり、年齢と共に多くのものを失う。社会的地位や役割を失い、親しい他者を失い、健康を失い、様々な能力や機能が衰退すると共に今までできていたことができなくなっていく。つらい経験が多く、しかもそれへの対処はむずかしく、乗り越えるよりも受容せざるをえないことが多い。つらさの原因に対して問題中心型の対処をするのではなく、情緒中心の対処や受け止め方を変える認知的対処等をする他はなく、基本的に状況は更に困難になっていき、つらさは強度を増していく。そのため、老いは人生における免れない四つの苦悩（生老病死）の一つ

1) 元順天堂大学  
(before) Juntendo University  
(Oct. 31. 2018 原稿受付) (Dec. 5. 2018 原稿受領)

であり、常にネガティブにとらえられてきた。しかし衰退と喪失の時期であっても、それは単なる「退化」ではなく、衰退と喪失に向き合い何とか折り合って生きていくということは一種の「適応」「発達」であるとして、老年期も発達心理学に含まれるようになり、必ずしもネガティブだけではないにとらえられてきている。そして平均寿命が伸び、高齢化が進むと共に、健康で経済的に余裕のある老人も増え、老いの問題を抱えていても人生をそれなりに生き生きと楽しむ高齢者も見られるようになってきている (Erikson (1964/1971) や Vaillant (2002/2008) は様々な事例を記している)。

本稿では、74才の高齢女性が語るつらい出来事への対処-59才の時に最愛の夫に死に別れた時、そのつらい出来事にどう対処し、その後の老年期をどう生きてきたか-が描かれた小説「おらおらでひとりいぐも」を取り上げる。そして主人公がどのような人生を生きてきてそこにどのような問題があるのか、彼女がつらい出来事にどう対処して老年期を過ごしているのか、つらさに対処する彼女の強さを可能にしたものは何かについて心理学の観点から考察を行う。

なお「おらおらでひとりいぐも」からの引用部分については、「イタリック体」で表記した。

## Ⅱ. 主人公の人生

「おらおらでひとりいぐも」は63才の新人作家の若竹千佐子氏が第158回(2017年度後半期)の芥川賞を受賞した作品である。主人公は74才の桃子さんで、彼女の一人暮らしの日常的な日々と、彼女のこれまでの人生が、東北弁と標準語が混ざった文体で語られる。彼女は愛する夫のため、家族のために生きてきたが、その生き方に疑問をもつようになり、夫の死と共にそれがより明確化し、自分の人生を自分の思うままに一人で生きることを目指すようになる。この小説について「老年期を生きることに希望を与える」という評は多く、審査員の一人も「魅力的な新しい老女の出現」と述べている(高樹, 2018)。

桃子さんは15年前、最愛の夫に死なれ、半年前には長年飼っていた犬にも死なれ、二人の子どもとは疎遠な関係で(一時娘との交流があったが、壊れてしまう)、他者と交流することなく孤独に過ごしているが、頭の中ではたくさんの声がそれぞれの考えや意見を言い合い(彼女はそれを小腸に密生している柔毛突起になぞらえている)、内面的には賑やかに過ごしている。桃子さんは元々他者との交流を楽しむというタイプでは

なく、ものごとを深く考えるのが好きな内気な女性で、夫の周造を「自分の話に耳を傾けてくれたただ一人の人」と言っていて、夫以外にはあまり自己開示しない人のようなのである(後に「見るだけの人生で、人にかかわる余地はなかったが、見るだけで自足していた」と言っている)。

彼女は東北地方で生育し、親に勧められるままに結婚することにするが、結婚式直前に逃げ出して上京する。自分の意志で生きることなく、親の言うままの人生を歩んできたが、初めて自分はどう生きるか、自分の人生を決めるために模索をすることになる。そして勤めていた飲食店で、東北弁を話す周造と出会う。彼は東北弁にコンプレックスを持つ彼女のコンプレックスを打ち破ってくれ、そして彼女にとって重要な故郷の八角山のことも知っていた。桃子さんはそんな周造に惹かれ、自分を託すことができる人だと感じて、結婚する。

結婚した桃子さんは、夫の期待に従い夫に合わせる日々を送る。「周造のために生きる」「周造の生きる手ごたえになる」「身も心も捧げつくした」と言っている。夫に尽くす妻-自分の生きていきたい人生は諦め、ひたすら夫に合わせる(それ故に子どもに過剰に手をかけたりする)妻-の悲哀や不満はよく耳にするが、桃子さんの場合は「諦めた」という意識はなく、そのことに満足しており、幸せな結婚生活だったようである。

しかし周造は15年前に急死してしまう。愛する人に急に死なれて桃子さんは絶望する。2ページにわたって、ページ全体が悲しみと絶望の叫びで埋まっている。その嘆きは、身も心も捧げつくした人、自分のアイデンティティの源でもある人を失った悲しみのためであるが、それだけでなく実は桃子さんはそのころ夫のことを十分見ていなかったため夫の異変に気づけなかったという後悔にも由来している。ずっと彼だけを見ていた桃子さんは、その少し前からその自分の生き方に窮屈さや疑問を感じ、彼を介在させず自分と向き合っていた時に彼は死んだのである。そして絶望と悲しみを感じる一方、桃子さんは「一人で生きられる」という喜びもあったと語る。

そして今脳内の柔毛突起たちが様々に語る。「人のために生きるのは苦しい」「自分よりも他人を大事にするのが愛か? 自分が一番大事だ。大事なのは愛より自由だ。自立だ」「愛を美化したらいけない。すぐにからめとられる」「半分しか生きていない。自分で作った殻の窮屈さを感じ始めていた」「ときたまあく

びをかみ殺していた。涙こぼしていた」「人のために生きるのはやっぱり苦しい。伸び伸びと羽を広げたい。自分の前にいる好きな人に合わせて羽を折りたたみ、その人に合わせて羽を動かす。それが苦しくなくてなにか。」

「自分で作った自分の殻が窮屈だと感じ始めたちようどその時に、もう周造を介在させず自分と向き合っていたまさにその時に彼は死んだ。自分にかまけたばかりに、あんなに好きだった周造の異変に気づけなかった。その悔い、痛みを今も引きずっている。」でもどんなに近くても他者である。桃子さんは自分のために生きたいと願うようになった。「もう引き返せないし、引き返さない。周造が死んで数年が一番自分の運が輝いていた」74才の桃子さんは言う。「世間から必要とされた役割はすべて終えた。もう自分は何の生産性もない。いてもいなくてもいい存在、生きる上での規範がすっぽぬけたっていい。…おらはおらに従う。どう考えてももう今までの自分ではいられない。すべての役割から降りた今、自分は自分に従う」

人生をかけて発見したことは、「どんな人生であれ、人は孤独である」ということである。「人は独り生きていくのが基本で、そこに緩くつながる人間関係があればいい」桃子さんは「悲しみを知った前後で自分は変わった。みんなこうやって生きているのだ おらも生きていていいのだと思うようになった」と言う。そして「まだ戦える。自分はこれからの人だ」と意欲にあふれている。

しかし誰ともつながらない人生を生き「見るだけの人生に満足している」と桃子さんは言いつつ、一方で「八角山のふもとで嘗々と生きてきた（自分と同じ悲しみを知って、黙して耐えて生きてきた）女たちの列に加わりたい」とも言っている。そして4章では「自分がずっと考えてきたことを誰かに伝えたい」という形で人とかかわりを求め、それがない桃子さんは立春の前日に大声で泣いている。しかし5章、小説の最後は、ひな祭りの日に一人でやってきた孫娘とのやりとりで、その可能性を感じたようで穏やかに終わっている。

### Ⅲ. 主人公の生き方の問題

桃子さんは幸せな結婚生活を送り、現在も淋しいけれど生き生きとした老後を送っている女性である。しかし生育の過程やその後の人生に発達上の問題がないわけではない。と言ってもそれらは著者がフィクション

として語っているだけであるし、特に生育史の問題は回想でわずかに語られているだけであるが、著者が造型した主人公がどのような心理学的問題を抱えた人物であるかをまず示したいと思う。

#### 1. 母親との関係

母親に関する記述は、「母親は勝気な人で、いつも命令口調で自分の思い通りにならないと気の済まない人だった」そして「母親はずっと実家にいることを勧めたが、それは家のため、実家を継ぐ兄のためであった」というネガティブなことだけである。桃子さんは自分の考えを押し付ける母親の顔色を窺ってばかりいたという。特に彼女が年相応に女らしくなることを嫌がって、おしゃれをしたりすると怒鳴られたりした。そのため桃子さんは自分の女の部分にどう向き合えばいいのかわからず、今でも自然な動作が苦手とある。自分のそのままを受け入れてもらえなかったため、伸び伸びと自分を表現したり振る舞ったりするのが苦手で、自然な自分を抑圧し、ごちない態度になってしまう。従って人づきあいが苦手なようであり、運よく巡り合えた夫以外の人とはあまりかかわらない人生を送ってきた。また母親の兄と自分への対し方の違いに傷ついて疎外感をもち、そのことが自分自身の息子と娘への対し方に影響していると言っている（そして自分と母親との関係が娘との関係に再現されてしまっ、娘の直美とうまくいかなくなってしまう）。桃子さんは母親のいうままに生きてきて母親の念願通りの仕事につくが、やがて勧められた結婚を蹴って自分の意志で故郷をでて東京に行き、自分の人生を生きることになる。

幼少期のことは書かれていないためわからないが、ものごころついてからの母親は彼女の気持ちや存在を受容して安心感を与えてくれる人ではなく、そのことが彼女の対人的絆組み(Bowlbyの内的作業モデル<sup>(注)</sup>)を不安定なものにしたことが伺える。判断の素材は不十分だが、成長期はアンビバレント型、成人後は夫以外に関しては回避的であるがそのことを寂しがっていても、アンビバレント+回避型と思われる。

〈注〉 Bowlby, J. (1969/1976) は、我々は幼少期の養育者との関係性に基づいて自己と他者の有効性に関する絆組み-他者は自分を受け入れてくれるのか、自分は他者に受け入れられるのか-を構成し、それに基づいて対人的情報を処理したり、対人行動をとったりするとした。その絆組みには愛着の型と対応した3つの型-安定型、有効性に自信をもてないアンビバレント型、回避型-があるとされる。

## 2. 夫との関係

2章で述べたように、桃子さんは周造に惹かれ、自分を託すことができる人だと感じて結婚し、結婚後は夫に合わせ、夫の期待に従う日々を送り、「周造のために生きる」「周造の生きる手ごたえになる」ことを目指したという。彼女はそのことに満足しており、幸せな結婚生活だったようである。彼女にとって夫は「自分の話に耳を傾けてくれたただ一人の人」であり、「夫を支えることで自分の輪郭を確かめる」と表現されているように、なくてはならない存在であった。夫が彼女の定点だという表現もあり、彼女は結婚によって「これが自分であると言える自分」「他者・社会と肯定的につながった自分」を選び取り、ある種の「アイデンティティの達成」を果たしたといえる (Erikson, 1959/1973)。

エリクソン理論では、アイデンティティを達成（第Ⅴ段階）すると自分のアイデンティティを他者のそれと融合することを目指すようになる（第Ⅵ段階）とされる。成人期初期の発達課題「親密性」においては、他者と融合することで「自分を失う一方、他人の中に自らを見出す」とあり、親密性の相手に合わせ、他者とのやりとりで相互性（相互に与え合い受け取る経験）をもちつつ自分を感じて充実感をもつとされる (Erikson, 1964/1971)。但し桃子さんの場合、アイデンティティは夫との関係にのみ基づいており、エリクソンの言う別個の2つの個がお互いに合わせながら自分を保つというあり方とは少し違うと考えられる。1つの個（夫の個）に合わせてしまい、自分がなくなって「他人の中に自らを見出す」という面が弱く、桃子さんのアイデンティティは個として不十分のように思われる。桃子さんは個をなくしてしまうような親密な関係をもつことで幸福を感じていたが、一方で自分で作った関係に窮屈さを感じ、半分しか生きていないという思いを持つようになっていた。そして次に述べるように、そのような生き方が子どもとの関係にも影響していたのである。

## 3. 子どもとの関係

娘は「母さんはお兄ちゃんばかりかわいがる」という不満をもっているが、確かに桃子さんは息子に一生懸命にかかわり、「母親」として生きてきたようである。しかしそれは実は、自分の期待を息子に押し付け、自分のやりたいことや自己実現を息子を通してしようとしてただけであり、「息子の生きる喜びを横合いか

ら手を伸ばして奪ったような気がする」と今になって思うようになった。自分と子どもを区別せず一体になってしまう母子密着、子どもを呑み込む母親であった。

成長すると息子は母親が鬱陶しくなり、のしかかられることを避けて、家を出て音信不通になってしまう。その後連絡はくれるようにはなったが、滅多に帰ってこないし、母親に心を開かない。桃子さんはオレオレ詐欺に引っかけたことがあり、娘はそれを母親の息子への愛情ゆえにとらえているが、桃子さんは息子への贖罪であり、自分が息子の生を空虚にしてしまった責任をとったのだと言っている。桃子さんが息子に過重にかかわり「呑み込む母」になったのは、桃子さん自身が自分の生を生きていなかったからであり、夫との関係や本人の生き方に問題があったからと考えられる。

娘は桃子さんと同じ様に、母親の兄へのかかわり方に疎外感を感じていた。彼女は近くに住んでいても電話一本寄越さないという関係だったが、2章は娘からかかってきた電話の話で、色々気遣ってくれる娘に桃子さんは喜んでいた。しかし娘に息子のお稽古事のためにお金を貸してくれと頼まれ、了承しなかったことで、また関係は悪化してしまう。貸さなかった理由はお金が惜しかったからではなく、娘の長女のこと浮かんだからとある（娘も自分の息子を偏愛していると思ったのである）。またかつて可愛らしいスカートを作ってはかせた時のことを、後になって「嫌だった。母さんは何でも思い通りにしたがる」と詰られたことがあり、娘にとって自分がかつての「勝手な自分の母親」と同じだったのだと桃子さんは悟る。

そのような母子関係－子どもに自分の思いを託してしまったり、双方の思いが行き違ってしまうこと－はよくあることだが、74才になり孤独な生活になっても子どもたちと疎遠なままであるということは、子どもとの関係にかなり問題があったと言えよう。エリクソンの成人期の発達課題である「生殖性」は、自分が生み出した者の世話をし、その発達を促し責任をもって育てることであり、そのためには相手に合わせて自分を調節することが必要であるが、桃子さんは子どもに合わせて自分を調節するよりも自分を押し付けてしまう傾向があり、そのことが問題をもたらしたとと思われる。

## 4. 家族以外の他者との関係

桃子さんは「容易に人と打ち解けられず孤立した人

間」で、日々「せいぜい隣近所と挨拶を交わす程度、たまに郵便配達や新聞の集金人と二言三言話すくらい」という孤独な生活を送っている。彼女は「自分の人生は眺めるだけの人生だが、見るだけで自足」して、人に何ら働きかけないし、「世間は仲間だの絆だのを強調して、それが無い者はどこか欠陥があるように言う風潮があるが、大きなお世話、弱いから群れるのだ」と言ったりしているが、その一方で人中にいたいと痛切に思うことがあって、3章では具合が悪いわけではないのに病院に行って、まわりの人を見たりしている。郊外の新興住宅地に家を建てて40年、そこで子どもを育ててきた桃子さんであるが、高齢になり親しかった人を亡くしたことが理由かもしれないが、それにしても少しおしゃべりする友人や知人もいないのは、他者との関係を作るのが苦手でそのために作ろうともしない対人的傾向-アンビエント+回避傾向-のある人だということだろう。

#### IV. 主人公のつらい状況への対処

桃子さんにとって、最愛の、そして自分のアイデンティティの源であった夫に急に死なれたことは絶望的なことであり、「天地がひっくり返るほどの大衝撃」「悲しみに震え上がった」というような大きな打撃を受けている。嘆きの文字が繰り返される尋常でないページもあり、真っ裸で踊り狂うというような異常行動（ジャズにあわせて仏壇の前で踊り、一枚また一枚と服を脱いでいったという）もしている。「息をつめて、痛みが通りすぎるのを待つしかない。何とか克服できたと思ったそばから再び返す痛み。逃げられない」「飼いならし自在に操れるはずの孤独が暴れる。ある日突然さみしいというような音が喉元から突き上げる」というような日々を送る。彼女のまわりには、悲しみをわかってくれる、あるいは話を聴いてくれる人はいないようである。つらい時、悲しい時にまわりの人からサポートを得ることは大きな力になるが、桃子さんにはそれもなかった。それでも彼女はやがて「悪いことばかりじゃない。このさみしさのおかげで賢く強くなった、違う人になった」というように変わっていく。

対象喪失への対処は、精神分析理論では「モーニング・ワーク（悲哀の仕事）」としてなされるが、それは悲しみや苦痛をそのまま自然に体験することで達成される（小此木, 1979）。しかし実際には外的世界への適応上の必要や悲哀の苦痛から逃れようとする心のあり方によって、そのプロセスが妨げられ歪められて

しまう。このつらい作業は、まわりの人、時に宗教家や精神科医、心理学者等の手助けによって可能になるとされている。

桃子さんはつらい出来事への対処として、次のような様々な方法を使っている。

#### 1. 今の状況にならなければできなかった生き方、今まで生きてこなかった別の面を生きってみる。

夫に合わせ期待に沿うようにして生きてきた桃子さんが、その夫を失ったからこそ踏み出せる生き方、それは「個」をもち、自立した生き方であった。かつて桃子さんはそれをめざし、新しい女のつもりで、家を出て故郷を捨てたのだが、周造と出会ってその生き方を自ら放棄した。そして周造と過ごした31年間は幸せであったが、本当にそれでよいのかという思いも出てきつつあった。夫からも社会からも何も期待されない今、桃子さんはかつて目指していた生き方-自分の思う通りに生きてみようと思ったのである。何かが可能になった時、そのことを嘆くだけでなく、現在可能で自分も納得できる生き方を探し、生きてみる強さを彼女はもち、そしてそれを試行錯誤していた時期のことを「生涯で最も輝いていた」と高らかに言うのである。

#### 2. 頭の中に声を作り出す

夫の死は到底受け入れがたく、「耳の奥が熱くなるほど周造の声を探して耳を澄ませていた」桃子さんは、ほぼ一睡もしないある明け方、彼女を気遣うやさしい夫の声を聴く。それからはしばしば夫の声が聴こえるようになる。当初はそれは外から聞こえ、桃子さんはあたりをきょろきょろ見渡していたが、やがて内側から聞こえてくることに気づく。熱烈に望んでいた夫の声が始めは幻聴のように聞こえたのだが、桃子さんはやがてそれを自ら作り出し、失った安心感や支えを得るようになるのである。寂しい子どもが「想像上の仲間」を作り出し、自分を支えることが論じられているが（森口, 2015；山岸, 2017 等）、老年期の孤独な桃子さんもそのようにして癒され支えられている。そして夫の声だけでなく、どこの誰だかわからない話し声も聞こえるようになる。その声は夫に代わる新たな話し相手となり、時に寂しさを癒し励ましてくれる。

しかも様々に言い合う声（柔毛突起）は、色々な観点からの意見を言い、物事を深く考えることが好きな桃子さんの論争相手にもなる。更に鬱の人が認知

行動療法（坂野, 2011 等）の働きかけによって、鬱をもたらし認知の仕方を変えるように、あるいは不合理な信念にとらわれた人が論理療法（Ellis & Harper, 1975/1981）によって合理的なとらえ方を示唆されるように、桃子さんをポジティブな方向に向けさせるようなことを言う場合もある。老いは寂しいと言うと「それはお前の本心か、自分で考えたことか、常識に引きずられるな」、老いは失うこと、寂しさに耐えることなのだと思うと「本当にそうなのか。老いとは経験を つむこと、わかることなのではないか。わかることは楽しいではないか」と、ひたすら寂しくネガティブな桃子さんに他の可能な見方を提示してくれるのである。

### 3. 人生への諦観とその受容－他の人への共感と連帯感

桃子さんは嘆き絶望するが、やがて人生はそういうものだという心境になる。「この世にはどうしようもないことがある。その前ではどんな努力も下手なあがきも一切通用しない」そして「それを認めてしまうと案外楽」なこと、自分だけでなく多くの人が経験していることに気づく。「それはみんな同じ。みんなもこうやって生きているのだ」誰もが親しい人を失い、役割を失い孤独に生きている、和解しなかったが母親もそうだった。長い晩年を一人で生きた母親に、桃子さんは今元気づけられると言う。

運命を受け入れて生きざるをえないということで、同時代の人々、そして過去から連綿と生きてきた人に共感し連帯感をもつ。桃子さんは八角山の麓で悲しみを乗り越えて営々と生きてきた人の輪に繋がりたいと言っており、以前は夫としかつながっていなかったが、悲しみ・絶望・諦めを経て他者（身近な他者ではないが）とのつながりをもつようになっていく。彼女は孤独な個を保ち、自由に生きつつ、居場所を得ている。

### 4. 人生の振り返り－よき時を思い出す

桃子さんには、2で述べたように脳内の声との話し合いや3のような見知らぬ他者との連帯はあるが、現実にはサポートをしてくれる人や話を聴いてくれる親しい人はいない。しかし彼女はしばしば過去を振り返り、安心感に包まれた幸せだった過去の自分とそれを可能にしてくれたまわりの人－特に祖母のことを思い出している。最愛の夫を失い、唯一のつながりを失った桃子さんは、つながれる他者を3では空間的に広げ4では時間的に広げることで得ているといえる。見知らぬ

人も過去の人もサポートの資源になりうるのである。過去に戻ることで現在のつらさを癒され、自分の人生全体をよきものとして受け止めているのであろう。人生を振り返り一回限りの自分の人生を自分のものとして受け入れるという老年期の発達課題「統合」について、エリクソンは多くの事例を示しているが（Erikson, 1964/1971）、桃子さんの生き方も「統合」に繋がっているように思われる。

またサポートを与えてくれた人としてだけでなく、その時はわからなかったが前世代も今の自分のようにつらい思いをしていたこともわかることで、その前世代は今の自分、これからの自分のモデルにもなり、自分も祖母の様になっていくのだというあきらめと同時に安心感も感じる事ができていると思われる。

### 5. 自分の思い、生きてきたことを後世代に伝える

夫以外の人とはかかわらず、見るだけ眺めるだけの人生を生きて、夫亡き後は自分だけに従うと宣言している桃子さんだが、最終章、最後から3ページ目になって、「それが自分に似合いの生き方だった」としながら「どうしてだろう。ここに至って、人とつながりたい、話したい。自分がずっと考えてきたことを伝えたい」「それで自分が引き受けた自分の人生が完結する」と言っている。どういうプロセスを経てそう思うようになったのかについては十分書かれていないが（彼女は「地球46億年の歴史」が好きなのだが、長い年月を生物は生き継いできて、自分はその命を繋いできたことの自覚は書かれている）、老いて死んでゆく人間は自分がやってきたこと、生きてきたことを後世代に伝えたいと思うのだろう。エリクソン理論は次世代を育て、次世代に自分を継承させることを成人期・老年期の課題として重視しているが、桃子さんもその課題に気づいたのだと思われる。

でも彼女には伝える人がいないということゆえか、立春の前日には大声で泣いている。そしてラストの2ページはだいぶ春めいたひな祭りの日。疎遠になっていく娘の子である小学2年生のさやかが一人でやって来て、桃子さんが祖母ともったような交流をもつ。こうやって私も自分の思いを伝えられるのだと桃子さんは思ったようである。

## V. 主人公の強さの源

4章で述べたように、桃子さんはつらい状況を乗り越えて、生き生きとした老年期を生きている。彼女の

強さの基にあるものとして以下のことがあげられる。

### 1. 祖母から得た基本的信頼

祖母(ばっちゃん)は桃子さんのあるがままを愛してくれた。いつも味方をしてくれる力強いサポート源で、母親とうまくいかない桃子さんに安定感を与えてくれた。桃子さんは一般的には最も重要な他者である母親との関係がよくなかったからなのか、対人的に安定した枠組みをもてず、親しい他者との交流をあまりもてなかった(40年同じ住居に住み続けていても親しい人はいない)。しかし夫の周造とは親密なよい関係をもてたのは、限定された関係ではあったが祖母との関係から自他に対する信頼感をもつことができたからと考えられる。そしてつらい状況でもそれに耐え、乗り越えることができたのも、祖母との関係から自分が生きているこの世界は信じられるという信頼感をもてたからであろう。

祖母は桃子さんを今でも見守ってくれるが、彼女には更に安心源の象徴のような八角山がある。八角山は桃子さんの故郷にある山で、彼女の心にもいつもある重要な山であり、周造に惹かれた一つの要因は彼が八角山を知っていたからであった。74才になった桃子さんは、八角山を「心の帰属する場所」であり「無条件の信頼、絶対の安心」を与えてくれ、「宗教に匹敵するかもしれない」と言っている。「ただそこに(心の中に)あるだけで、何も見守ってくれる」八角山と祖母、彼女は何があっても自分を委ねようと思う信頼できる世界を持っていることがその強さの第1の源である。

### 2. 周造との関係—アイデンティティの元、そして全面的受容による安定感の源

なぜ桃子さんがそれほどまでに周造に惹かれたのか、31年間にわたって周造の期待に合わせようとし続けたのか、必ずしも十分に説明されていない。但し恋愛は合理的に説明できない部分があるし、彼女の場合はアイデンティティの確立に役立ったということが恋愛に効いており、また二人のもつもの、求め合うものが非常に合っていて相互性がうまく働き、双方が満足できていたからだと思われる。

彼女は自分らしい生き方を求めて勧められた結婚を蹴り故郷を出てきた人で、「自分」をもとうとする志向、アイデンティティの達成を強く求める人であった。彼女は周造と出会い結婚することによって「これが自分

であると言える自分」をもつことができたといえる。アイデンティティ達成の要件—1) 独自性 2) 一貫性と連続性 3) 自分で主体的に選択 4) 他者・社会に肯定的に位置づく—(Erikson, 1959/1973)に関して、1) 3) は勿論、2) に関して周造と結婚し共に生きることが生きてきた自分や現在の自分らしさにつながり、生きていきたい自分ともつながった一貫した自分を保ちながら、4) 周造の妻という形で自分を位置付けることもできて、アイデンティティを達成できたのである(2章で述べた様に、周造との関係性に個の側面が不十分という問題はあったが)。結婚後も周造は彼女を全面的に受容してくれたし、周造の期待に合わせようとした桃子さんの努力は報われ、二人はよい関係を持ち続けたようである。最愛の夫に全面的に受容されて、桃子さんは安定感や有意味感を持つことができた。そしてそのことが、幸せであると感じつつ一方でその生き方に疑問を持たせたり、絶望した時に別の生き方を模索する強さも与えたのだと考えられる。

### 3. レジリエンス特性

桃子さんは考えることが好きで、自分の行動や気持ちについても振り返って考えることが多い人である。更に4章で彼女は脳内で認知行動療法や論理療法のようなことをやっていたと述べたが、普通はカウンセラーがやるようなことを桃子さんは自分でやってしまう(柔毛突起にやらせてしまう)力をもっているようである。彼女は自分の状況がネガティブであっても、その状況を様々な面から検討し、ポジティブなものに気づくことができる。がっかりしている自分に「たいていこのことは思い通りにならなかったけれど、何とかやってきたではないか。だから今度だって何とかなる」と自分を振り返りつつポジティブに励ますことができるのである。そのような自分のやっていることを振り返り、様々な面から検討し、それに応じて自分を調整する能力、そしてポジティブなものに気づく能力が彼女を強くしていると考えられるが、それはレジリエンスと関連した特性である。小塩 他(2002)のレジリエンス尺度—感情調整・肯定的な未来志向・新奇性追求から成る—や石毛・無藤(2005)のレジリエンス尺度—自己志向性(自分の判断や行動を見直して自ら問題解決をしようとする傾向)・楽観性・関係志向性からなる—のそれぞれ前2者に該当するといえる。

またレジリエンスと関連し、ストレスに負けず健康

を維持することを可能にするものとして、アントノフスキー（1987/2001）は首尾一貫感覚という概念を提唱したが、それは把握可能感・処理可能感・有意味感から成るとされる。桃子さんはその首尾一貫感覚に関する志向性も強いようである。彼女は「何にでも意味を求める人」であり、「意味さえあれば我慢もできる」と述べており、有意味性をもちたい気持ちが強く、また世界をわかりたいという気持ちも強く、わからないことがわかるようになる老いは、「面白く興味津々」なのである。現実には把握可能感や有意味感をもっていることとそれへの志向性は同じではないが、志向性があるのは、それをもち更に求めるからと考えられる。

#### 4. 主体感一個の充実を求める思いの強さ

桃子さんは夫に合わせ、夫を支えること、あるいは二人の子どもを育てることに力を注いで成人期を生きてきた。我々の心の充実には、何事かを自分が成し遂げたという個＝主体の充実感と、他者と心を通わせたり交流することで得られる関係性の充実感があると思われるが、山岸（2018）はそれを主体感と相互性として、その観点からエリクソンの自我発達理論を再考している。エリクソンの成人期は相互性が大きな意味をもつ時期であり（Erikson, 1964/1971）、次世代を育てることにおいては他者との相互作用・相互性による充実感が経験されるが、ものや思想を生み出し育てることに限っては主体感一個の充実の面が強いように思われる。

フロイトは成人期の充実を問われて「Lieben und Arbeiten（愛することと働くこと）」と答えたが、男性は比較的容易に両方を経験できるのに対し、女性は「家庭か仕事か」という形で選択を強いられることが多く、両方の充実（少なくともかつては）なかなかむずかしかった。但し個の充実への思いの強い女性の中には、他者への生殖性を発揮しながら個の充実にも力を注いだ者もいる。例えばクララ・シューマン、マリー・キュリー、与謝野晶子、神谷美恵子…。家庭を守り、子どもの世話をしながら、超人的な努力で創造的な仕事を成し遂げている。

桃子さんは周造の魅力に惹かれて生の充実を相互性に限る人生を歩んできたが、そもそも桃子さんは個の充実を人一倍求める人だったようである（「新しい女」のつもりだったのに、結局古い生き方に絡めとられたと嘆いている）。周造と共に生きる中で封印した思いが段々でてきて苦しくなり、彼の死を契機に生きてこ

なかつた生を生き直すことにする。「桃子さんは戦いたい人間であった。にもかかわらず、いかに愛されるか－従順や協調を目指してやってきた」とあるが、彼女の中には「全力でやり通したい、目的を立てそれを完遂したい」という強い願いがあり、それが周造の死と共に明確に出てきたのである。

彼女が立ち直ることを可能にしたのは、その思いの強さであると考えられる。彼女は芸術家や学者のような仕事をなすわけではないが、「自分に従い、自分のために」「思い通りに自分の力で生きよう」と思い、「自分が一番輝いていた」と思う生き方をするのである。

## VI. おわりに

以上「おらおらでひとりいぐも」の主人公がいかにしてつらさを乗り越えたか、何がそれを可能にしたのかについて分析を行ってきた。小説は事実ではないので、そこから一般的な法則を導き出すのではなく、著者の記述をどう読み取れるのかについて心理学的な解釈を行った。

老年期は衰退と喪失の時代であり、生き生きと充実感をもって生きることは徐々にむずかしくなっていく。しかし人生100年時代になった今、それなりに充実感をもてる期間は以前よりも増えているし、つらい状況に対しても受け入れるだけでなく、乗り越えて生きることもある程度可能になってきているといえる。桃子さんはまだ元気な高齢者だが、生き生きと生きている彼女の姿やその生き方は、老年期を生きている人にとって、そしてやがて老人になる人にとっても、参考になると思われる。

現実にはできなくても、自分で作り出した声と交流するというように頭の中で経験することは可能だし、現在がつらいものであっても過去に戻ったり、未来につながる希望をもつことはできる。人は見える世界だけでなく見えない世界でも生きうるし、現在だけでなく、過去－現在－未来の中を生き、前世代・後世代とのつながりの中で生きている。桃子さんの場合はまだ元気で世話をされる状態ではないが、世話をされることで他者とポジティブにつながることもありうる。現在の自分が衰退と喪失、悲しみやつらさの中にあっても、それも含めて自分の人生全体をポジティブに受け止めることは可能であり、それはエリクソンの老年期の発達課題の「統合」に該当するといえよう。

## 引用文献

- Antonovsky, A. (1987/2001). 山崎喜比古, 吉井清子監訳. 健康の謎を解く－ストレス対処と健康保持のメカニズム. 有信堂.
- Bowlby, J. (1969/1976). 黒田実郎他訳. 母子関係の理論 I 愛着行動. 岩崎学術出版社.
- Ellis, A., & Harper, R.A. (1975/1981). 国分康孝訳. 論理療法：自己説得のサイコセラピー. 川島書店.
- Erikson, E.H. (1959/1973). 小此木圭吾訳編. 自我同一性：アイデンティティとライフ・サイクル. 誠信書房.
- Erikson, E.H. (1964/1971). 鏑幹八郎訳. 洞察と責任. 誠信書房.
- Erikson, E.H., Erikson, J.M., & Kivnick, H.Q. (1986/1990). 朝長正徳, 朝長梨枝子訳. 老年期－生き生きとしたかわりあい. みすず書房.
- Goldstein, S., & Brooks, R.B. (2005). Handbook of Resilience in Children. Springer : New York.
- 石毛みどり, 無藤隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンス及びソーシャル・サポートとの関連. 教育心理学研究, 53, 356-367.
- Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984/1991). 本明寛, 春木豊, 織田正美監訳. ストレスの心理学－認知的評価と対処の研究. 実務教育出版.
- 森口佑介 (2015). 空想の友達－子どもの特徴と生成メカニズム. 心理学評論, 57-1, 529-539.
- 小此木圭吾 (1979). 対象喪失－悲しむということ. 中公新書.
- 坂野雄二 (2011). 認知行動療法の基礎. 金剛出版.
- 高樹のぶ子 (2018) 芥川賞選評 文芸春秋95号 P.326.
- Vaillant, G.E. (2002/2008). 米田隆訳. 50歳までに「生き生きとした老い」を準備する. ファーストプレス.
- 若竹千佐子 (2018). おらおらでひとりいぐも. 文芸春秋95号 P.408-479.
- 山岸明子 (2015). 心理学で文学を読む－困難を乗り越える力を育む. 新曜社.
- 山岸明子 (2017). つらさを乗り越えて生きる－伝記・文学作品から人生を読む. 新曜社.
- 山岸明子 (2018). Eriksonの自我発達理論再考－主体感と相互性の観点から－. 医療看護研究, 21-2, 83-92.